

# 「福岡県内の『神功皇后』ゆかりの神社」の訪問記

## 2021年、福岡県内の神功皇后表象の現在を考える

陣内 恵梨

### はじめに

2009年1月、宗像・沖ノ島と周辺の祭祀遺跡が国際連合教育科学文化機関（以下、ユネスコと表記）の世界文化遺産暫定リストに登録されたことをきっかけに「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議が発足。精力的な活動の結果、2015年のイコモス（国際記念物遺跡会議）による現地調査を経て、2017年7月、第41回世界遺産委員会において「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は正式に世界遺産として登録された<sup>(1)</sup>。

2021年に行った福岡県観光振興課への聞き取り調査によれば<sup>(2)</sup>、福岡県では「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録に向けた取り組みの一環として、2016～2017年にかけて「古代の旅」の観光ブランド化に注力しており、ここで取り上げる神功皇后とその伝承地は「宗像・沖ノ島と関連遺産群」と同じ「古代」をキーワードとして、県を挙げての観光振興プロジェクトの組上へと浮上したものである。2016年に刊行・配布された「福岡古代ロマンの旅 vol.3『福岡県の神社と神功皇后』」<sup>(3)</sup>と2017年4月にオープンした福岡県観光振興課管轄HP「ご来福しよう」<sup>(4)</sup>において、神功皇后はそれぞれの雑誌で次のように紹介されてい

る。

福岡県の歴史ある神社のほとんどが共通してある1人の女性との縁（ゆかり）があるのをご存知ですか？ その女性の名は「おきながたらしひめ」といい、のちに「神功皇后」と呼ばれた古代日本のヒロインです。古事記・日本書紀によれば、神功皇后は聡明で美しく、神のお告げを告げる巫女でもあり、身重でありながら男装し渡海するなど謎に満ちた存在です。当時筑紫と呼ばれた現在の福岡県全域を舞台に大活躍した神功皇后のゆかりの神社や史跡が福岡県内には多数存在します。

今から約1800年前、摩訶不思議な力を持って政治に関わり、多くの伝説を残した女性がいることを知っていますか？ その女性の名前は、神功皇后です。日本の古い書物である「日本書紀」によると、神功皇后は、第14代目の仲哀（ちゅうあい）天皇の妻であり、第15代の応神（おうじん）天皇の母であったと記されています。神功皇后の伝説の中でも特に有名なのが、妊娠中でありながら軍を率いて朝鮮半島に

渡り、韓国の三国を治めたという武勇伝です！ そのキッカケは、皇后が夫の仲哀天皇と一緒に現在の香椎宮（福岡県福岡市）に滞在していた時のこと。天皇が急に亡くなったため、皇后は神のお告げに従って、自らが先頭をきって朝鮮に出兵しました。しかしその時、皇后はなんと身ごもっていたのです！ そのため、鎮懐石（ちんかいせき）という石をお腹に当てて出産を遅らせたという不思議なエピソードが残されています。

住吉三神・天照大神の神託に従い、海を渡って、新羅をはじめとする朝鮮半島の国々を征服したという神功皇后の武勇伝（出兵譚）、いわゆる「三韓征伐」伝説は、朝鮮半島に対する日本の侵略戦争を正当化するための根拠となり、皇国史観涵養の上での重要なエピソードとして、為政者や一部の知識人たちの間で繰り返し取り上げられてきた言説であった。日本史上において、海外領土獲得の大義名分として「三韓征伐」伝説が引用された有名な例として、豊臣秀吉による朝鮮出兵、明治の征韓論が挙げられる。また、神功皇后の「三韓征伐」伝説は、



図1 文部省『小學國史：尋常科用 上巻』文部省、1940年

為政者や一部知識人層に限らず、国内の各地に点在する八幡宮での祭典や演劇、地域の伝承などを通して庶民にも広く共有されていた<sup>(5)</sup>。そのため、神功皇后を題材とした表象は、低年齢層向けの教科書や子供向け絵本などの書籍に限らず、絵馬や浮世絵、絵巻に五月人形など、様々な媒体を通して日本国内、とりわけ、その伝承地が数多く残っている西日本を中心に広く浸透していたのである。

しかしながら、1945年のアジア・太平洋戦争における大日本帝国の敗北により、神功皇后の扱われ方は一変していくことになる。GHQによる占領期を迎えたことで、神功皇后は日本を根拠なき侵略戦争に駆り立てた原因として排除されることが決定した<sup>(6)</sup>。その最も顕著な例として、国定教科書『小学國史：尋常科用』に掲載されていた「神功皇后」【図1】の項目の削除が挙げられよう。こうして、1945年の敗戦以降、「三韓征伐」に代表される神功皇后の軍事的側面は徐々に忘却<sup>(7)</sup>、あるいは削ぎ落とされていったのである。その一方、母・神功皇后と息子・応神天皇にまつわる神秘的な出産譚に由来する鎮懐石のエピソード<sup>(8)</sup>、すなわち妊娠・出産に代表される神功皇后の「母」としての側面は強調されていく<sup>(9)</sup>。こうした背景から、1945年以降に行われた神功皇后の軍事的側面の忘却と母性的側面の強調の延長線上に、2017年の「宗像・沖ノ島と関連遺産群」のユネスコ世界遺産登録をきっかけとする、福岡県における神功皇后とその伝承地の「古代の旅」としてのブランド化を位置付けることは可能である

う。それでは、県を挙げての観光地化によって、一度は表舞台から忘却された神功皇后が再び浮上してきたことになるが<sup>(10)</sup>、肝心の現地において、神功皇后はどのような存在として扱われ、表されているのだろうか。

### 調査対象と分類方法について

ここでは、福岡県を挙げての観光促進事業に神功皇后が取り上げられた最も早い例として、2016年に刊行・配布された「福岡古代ロマンの旅 vol.3『福岡県の神社と神功皇后』」（以下、「福岡古代ロマンの旅」と表記）に着目してみよう。このパンフレットでは「福岡県内の『神功皇后』ゆかりの神社」として21社が紹介されており、いずれの神社に関しても、神社の祭典や地名の由来、神社の成り立ちとも強く神功皇后伝承が結びつけられていることが特徴である。観光パンフレット「福岡古代ロマンの旅」には、「香椎宮」「住吉神社」「宮地嶽神社」を皮切りに、「箱崎宮」「宇美八幡宮」「現人神社」「鎮懐石神社」「志賀海神社」「竈門神社」が紹介され、「大己貴神社」「風浪宮」「高良大社」「大善寺玉垂宮」のほかにも、「大分神社」「風治神社」「八幡古表神社」「若松恵比寿神社」「篠崎八幡宮」「和布刈神社」「宗像大社」などが掲載されており、番外扱いで「裂田溝（裂田神社）」までが載せられている。2020年から2021年にかけて、パンフレット内で紹介されている21の神社へと実際に足を運び、神功皇后が現地にて、どのように表されているのかを調べてきたので、それを報告する。

「福岡古代ロマンの旅」にて取り上げら

れた21の神社は、いずれも神功皇后伝承と強く結びついた神社である。しかしながら、実際に現地を訪問し、その境内に足を踏み入れ、由緒書に目を通した瞬間、その神社がどれほど神功皇后を意識しているのかの程度が明らかになった。まず、訪問した21社において、境内の由緒書に神功皇后の名前と伝承が確認できたものは、15社であった。しかし、境内に神功皇后に関係する神木や御神体、伝承に係る史跡などが残され、それらが境内の看板等で紹介されているのかという点に着目すると、その数は10件にまで減少した。さらに、境内にて参拝客が視認できる場所に配置された絵馬・掛軸などの奉納物から売店の商品にまで目を通し、神功皇后表象の有無について調べたところ、全21社中の5社にしか確認できなかった。また、観光パンフレット「福岡古代ロマンの旅」では、神功皇后像として、古墳時代の鎧に身を包み、弓矢を手にした女性兵士【図2】のイラストを



図2 「福岡古代ロマンの旅 vol.3『福岡県の神社と神功皇后』」における神功皇后の拡大図

載せている。このように、古墳時代の武具・防具を着用した兵士として神功皇后を描写することは、前述の国定教科書挿絵とも共通する表現の一種である。しかしながら、今回訪問した神社で確認できた神功皇后表象は、必ずしも、国定教科書的な神功皇后イメージを共有していなかった。この事実を踏まえ、ここでは、今回の調査によって明らかになった神功皇后表象の多様性を今後の表象の展開を考察する上での一助になることを期待し、取り上げることにする。

## 1. 「『神功皇后』ゆかりの神社」における神功皇后の不在

2020年から2021年にかけて訪問した21の神社において、境内の由緒書に神功皇后の名前が確認できなかった神社は掲載順に「住吉神社」「箱崎宮」「竈門神社」「高良大社」「和布刈神社」「宗像大社」の6社である。このうち、住吉三神は「三韓征伐」のきっかけとなる神託を受けた神であるが、実際に住吉神社を訪問した際、境内の由緒書や立て看板、売店のお守りなどに、神功皇后の名前は確認できなかった。これは、同じく住吉三神を主祭神とする、後述の現人神



図3 箱崎宮境内の由緒書【筆者撮影】

社とは異なっている。「福岡古代ロマンの旅」のラストページに宗像大社が「世界遺産候補地」として紹介され、パンフレットの説明には「宗像大社は交通安全の神様として福岡県民に親しまれていますが、神功皇后が渡海の際に航海の安全を宗像で祈ったことが由来との説があります」と掲載されている。しかし、実際に宗像大社に足を運び、境内の神宝館に足を運んでも、神功皇后の名前やゆかりのものを確認することはできなかった。箱崎宮を除く6社に共通しているのは、主祭神として神功皇后・応神天皇以外の祭神を祀っている点である。全国規模で信仰されている住吉三神や玉依姫、あるいは、高良玉垂命・宗像三女神といった、土着の神々を古くから信仰してきたため、神社の方も、神功皇后や応神天皇よりもそちらの神々をフォーカスする形で取り上げているのであろう。

それだけに、神功皇后の存在を除外している箱崎宮の特異性が浮き彫りになる。本来であれば、箱崎宮は、応神天皇の出産と深く結びついた筥松のほか、楼門に「敵国降伏」の扁額を掲げていることから、神功皇后の「三韓征伐」や元寇に由来する神風信仰とも密接な関係性を保持する神社である。しかし、箱崎宮の祭神として神功皇后・応神天皇は紹介されてはいるが、神社の由緒書に応神天皇の出産を含む「三韓征伐」関連のエピソードは掲載されていない。2021年2月に確認できた立て看板に掲載されていたのは下記の文言のみである【図3】。

箱崎宮は醍醐天皇の延長元年（九二三年）に創建され、延喜式神名張に八幡

大菩薩箱崎宮一座名神大社とある。宇佐・石清水両宮と共に日本三大八幡として朝野の崇敬あつく、特に鎌倉時代以降は武神として武家の信仰をあつめた。なお、「敵国降伏」の宸翰を掲げる楼門は伏敵門として有名である。

そして、境内にて注目を引く形で取り上げられているのは、亀山上皇尊像や蒙古軍戦の碇石などの元寇関連の史跡であった。地名の由来となった宮松の側には説明用の立て看板が確認できたが、応神天皇の名前しか載せられていなかった。「福岡古代ロマンの旅」は「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録を目的とし、「古代」を双方を結びつけるキーワードとして神功皇后を取り上げたものだが、箱崎宮での現地散策から読み取れたものが、徹底した「古代」（より厳密に言えば、「三韓征伐」伝説）の排除であることは、県を挙げての観光事業促進とその対象となった現地との間に、一種のズレがあった証左とも言えるのではなかろうか<sup>(11)</sup>。

## 2. 現代における神功皇后表象を読み解く

「福岡古代ロマンの旅」において「福岡県内の『神功皇后』ゆかりの神社」として紹介された全21社のうち、神功皇后の表象を訪問時に視認できた神社は5社に限定される。パンフレット掲載順に並べると「香椎宮」「宮地嶽神社」「宇美八幡宮」「現人神社」「八幡古表神社」がそれに該当する。そのうち、御神体としての神功皇后像

図4 八幡古表神社境内の木造女神騎牛像に関する立て看板【筆者撮影】



を所蔵している神社として、八幡古表神社と宇美八幡宮を挙げることができる。どちらの御神体も大切に保管されており、八幡古表神社の木造女神騎牛像<sup>(12)</sup>は4年に一度、宇美八幡宮の聖母宮御神体<sup>(13)</sup>は25年に一度の大祭の時に限定される形で一般公開される。しかしながら、双方の神社の境内において、御神体を被写体として撮影した写真の展示は確認できず、前者においては立て看板での説明【図4】、後者においてはアレンジされた神像の模写絵に留められていた。そのため、現地を訪問することで確認できる神功皇后表象として取り上げるには不適切であるとし、今回は御神体を取り上げないことにする。ここでは、「八幡古表神社」を除く、「香椎宮」「宮地嶽神社」「宇美八幡宮」「現人神社」への訪問時に視認可能かつ神社の公式HPや神社案内、社務所などで販売されている商品に描かれている神功皇后イメージを表象として取り上げ、パンフレット掲載順に紹介する。

## 3. 香椎宮の対照的な二つの大絵馬

香椎宮境内には神功皇后を描いた表象として二つの絵馬が確認できる。2021年の香

図5 香椎宮境内本殿付近配置の奉納絵馬①【筆者撮影】



図6 香椎宮境内不老水の奉納絵馬②【筆者撮影】



香椎宮境内不老水の奉納絵馬②【筆者撮影】  
 問時に神社関係者に確認したところ、どちらも1983年に奉納されたものであるとのことだった。しかしながら、この二つの絵馬の題材が、非常に対照的であることに着目したい。香椎宮境内に奉納された絵馬【図5】の神功皇后は古墳時代の鎧に身を包み、髪は美豆良に結え、勾玉の首飾りを着用している。よって、この絵馬は戦闘状態の神功皇后を描いたものと判断できる。神功皇后は、ただ一人、敷物の敷かれた座椅子に腰を下ろしており、画中の権力構造は容易に読み取れる。さらに、ここでの神功皇后は、おおむね、考古学的に「正しい」とされる風体で描かれているものの、その右手には軍配が握られているという意味で歴史

的に「正しい」図像とは言い難い<sup>(14)</sup>。「松の木が生えた砂浜」で「海の向こうを見つめる」神功皇后の姿は前述の国定教科書挿絵にも通じる構図であり、1910年の国定教科書使用以降に増加した神功皇后イメージであった<sup>(15)</sup>。この絵馬が奉納された先が香椎宮であることを踏まえるに、これが香椎の浜から出兵しようとする神功皇后を題材にしたものと解釈できる。

ところが、本殿から少し離れた場所に位置する不老水<sup>(16)</sup>の泉の側に設置されている二つ目の絵馬において、神功皇后の装いはガラリと変わっている【図6】。先の絵とは異なり、画面の右上には但し書きが確認できるが、そこには次の様に記されている。

武内宿禰ハ聖水を汲ミ 仲哀天皇ニ奉  
 献スルノ図

この「聖水」とは、香椎宮近隣で長寿の泉として親しまれている日本名水百選の一つ、不老水より組み上げられた水を指す。記紀神話において武内宿禰は、300歳まで長生きしたという伝説が残る人物だが、香椎宮では武内宿禰の長寿の理由をこの神泉にあると説明している。よって、この絵馬は香椎宮の神泉より汲み上げられた「聖水」を老臣・武内宿禰が仲哀天皇に献上する場面を描いたものであると読み取れる。画面の左右を横断するように注連縄が張られた先に描かれた山脈の麓にある丸い穴は「聖水」の水源たる泉である。画中の人物たちの外見的特徴から判断するに、画面左下の灰色の衣の老翁こそ武内宿禰であり、その眼前には黄金の壺に汲み上げられた「聖水」

が収められていると読み取れる。それゆえ、それを受け取る側、冠を被った男性こそが神功皇后の夫であり、応神天皇の父である仲哀天皇であることは疑いようがない。したがって、その背後（あるいは傍）につつましく控えている女性こそが神功皇后であるということは、容易に想像がつく。

ただし、仲哀天皇・神功皇后共々、一つ目の絵馬とは異なり、古墳時代の風体というよりも、奈良時代の礼服を連想させる衣装に身を包んでいることに着目したい。どちらの絵馬も、画家が己の想像力を駆使して神話の光景を描いたのだと推測できるが、国定教科書挿絵をはじめに巷間に広く普及していた古墳時代の兵士姿の神功皇后イメージとは異なり、戦を介在しない空間における「古代」の貴人を描写するには限界があり、このような風体で描く他なかったのだと考えられる。管見のかぎり、非戦闘状態の神功皇后を描写する場合、服飾史的に飛鳥・奈良時代の装束を代用することは1930年代の表象においても確認できる特徴である<sup>(17)</sup>。なお、「聖水」の奉獻の場面を描いたこの絵馬において、最も高貴な人物は仲哀天皇である。それは彼の被っている冕冠を模した冠、画面中央という配置



図7 香椎宮境内・巨大立て看板【筆者撮影】

場所、遠近を無視して不自然に大きく描かれている点からも明らかである。これらの要素から、ここでの神功皇后はあくまで脇役であり、先の絵馬から読み取れるような英雄譚の主人公としての側面を確認することはできない。前近代に制作された神功皇后表象の共通点として、神功皇后は物語の主人公として描写され、彼女が誰の妻・誰の母であるかについてはさほど重視されていないことが挙げられる<sup>(18)</sup>。しかしながら、前述の理由から、この絵馬は夫を上位存在とする夫婦の力関係、より直接的な物言いをするのであれば、夫に対する妻の従順さが反映された神功皇后表象であると言えよう。

なお、八幡古表神社・宇美八幡宮の御神体とは異なり、1983年に奉納された絵馬をここで取り上げた理由は、香椎宮が神社内で配布されるパンフレットや公式HPにおいて「聖水」奉獻場面をモチーフとした絵馬に描かれた仲哀天皇・神功皇后を「神社の顔」として採用しているためである。補足するのであれば、2021年2月に入手したパンフレット表面には「愛つなぐ、香椎宮」というキャッチコピーが載せられているが、このコピーは境内に設置されている巨大な立て看板においても確認できる【図7】。2021年4月にリニューアルオープンされた香椎宮の公式HPのトップには「夫婦の宮、香椎宮」という文字が見られる他、関連サイトであるEカシヒノミヤでは、夫婦神として仲哀天皇・神功皇后を喧伝する形で、夫婦の愛を媒介に、世界平和を為さんとする壮大なプロジェクトが試みられて

いる<sup>(19)</sup>。

#### 4. 宮地嶽神社における掛軸

2016年に日本航空のCMの舞台として選ばれた宮地嶽神社は、「光の道」を見ることができる景勝地として、県の内外に人気のある観光名所である。2021年5月に現地を訪問した折、境内を隅々まで探索したが、今回紹介する掛軸以外に神功皇后だと断定できる表象を確認できなかった。そのため、この掛軸に描かれた神功皇后こそ<sup>(20)</sup>、宮地嶽神社が打ち出す神功皇后イメージとして取り上げる【図8】。掛軸には三柱の神々の姿が描かれており、神社の方々の説明によれば、三角形の頂点の位置に描かれている人物が神功皇后であり、その下の二柱が同じく神社の祭神である勝村・勝頼大神<sup>(21)</sup>とのことである。宮地嶽神社では、この三柱の神々を「宮地嶽三柱大神」として合祀している。

画中の神々の服装や身体的な性差の描き分けはなされておらず、皆、似通ったいで



図8 宮地嶽神社販売掛軸・拡大図【筆者撮影】

たちと中性的な容貌で描かれている。補足するならば、正面を向いている神功皇后は下の二柱と比べるとややふくよかな顔つきをしていると言えよう。神功皇后は、右手に神事に用いる榊の枝を、左手は頭推太刀と推測できる武具の上に添えている。武具については、宮地嶽神社境内にある丸塚古墳より発掘された古墳時代後期の大刀を意識した持物だと考えられる。掛軸内に描かれている三大神は、皆、緑の宝玉を連ねた首飾りで胸元を飾っているが、上述の大刀同様に、ここにも丸塚古墳から発掘された副葬品・緑瑠璃珠の影響が考えられないだろうか。しかしながら、武具・装身具とは異なり、描かれている神々の装束の時代区分ははっきりとしない。それぞれ、挂甲と思しき古墳時代の防具の上から直垂に類似した衣装を身につけているものの、これらが服飾史的にいつのものであるかという断定は非常に困難である。ただし、香椎宮の神功皇后表象とは異なり、祭祀者であると同時に、武闘的なイメージと結びついた神功皇后像であることは間違いない。

#### 5. 宇美八幡宮境内の母子像

今回訪問した神社の中で神功皇后に関する表象の数が最も多く確認できたのが、宇美八幡宮である。香椎宮・箱崎宮と並び、宇美八幡宮も神功皇后伝承と強く結びついており、記紀神話においても地名が確認できるという意味からも要所である。境内には応神天皇の出産譚にまつわる御神木や水源があり、妊婦たちの信仰の証である子安石が山のように積み重ねられている光景が確認で



きる【図9】。



図9 宇美八幡宮境内・子安石【筆者撮影】

境内に建てられた神楽殿には脚を踏み入れることはできないが、奉納された絵馬を遠目に確認できる。しかし、それ以上に境内において目を引くのが、八幡宮前の道路に面した場所に《子安乃像》と命名された母子像である。宇美八幡宮には室町期作と伝えられる神像が御神体として祀られていることを前述したが、この御神体をモデルに制作されたのが《子安乃像》である【図10】。通常、御神体は25年に一度の式年大祭の時にしか公開されないため、2018年



図10 宇美八幡宮境内・《子安乃像》【筆者撮影】

における式年大祭後に宮司と奉賛会のメンバーが協力して、参拝者たちに、より身近に御神体を感じてもらえることを目的として、2020年に完成した《子安乃像》を、同年の10月に奉納したというエピソードが関係者への聞き取りから明らかになった<sup>(22)</sup>。しかしながら、この《子安乃像》は聖母宮に祀られている御神体をモデルにしているものの、モデルとは異なり、その腕に赤子である応神天皇を抱えていることに着目したい。境内には、同様の構図として《聖母子像》【図11】と命名された1984年奉納の石像が確認できる。先述の《子安乃像》を、同じく境内に奉納されている《聖母子像》と比較すると、その最大の違いは、母・神功皇后の非戦闘性にあると言えるだろう。1984年の《聖母子像》の神功皇后は、両手で応神天皇を抱えながらも、左半身に頭椎太刀を佩刀している。一方で、《子安乃像》は寸鉄帯びぬ姿の像である。これまでに神



図11 宇美八幡宮境内・《聖母子像》【筆者撮影】

功皇后の表象は数多く制作されたが、神功皇后自らが我が子である応神天皇を抱くという構図の表象は非常に珍しい<sup>(23)</sup>。その点において、《聖母子像》も《子安乃像》も新たな神功皇后イメージを創出したという意味で共通しているが、HP等を確認する限り、宇美八幡宮が積極的に神功皇后イメージとして打ち出しているのは、《子安乃像》の方である。赤子を抱く観音像、あるいは、キリスト教における聖母マリアと幼子イエスの関係性にも通じる《子安乃像》の構図は、神功皇后表象を考える上で、今までにない「新しさ」を打ち出したのだと言える<sup>(24)</sup>。

## 6. 現人神社販売のステッカー符と絵本

神社のHPによれば、現人神社は全国に二千余社ある住吉三神を祀った住吉神社のルーツである。そのため、神社の主祭神は住吉三神であるが、相殿として神功皇后を祀っている。現人神社から少し足を伸ばせ



図 12 現人神社・道中安全ステッカー符【筆者撮影】

ば、同パンフレット内で番外として紹介されている裂田神社と日本最古の農業用水路・裂田溝を訪れることも可能だ。『日本書紀』によれば、裂田溝は神助に感謝した神功皇后が住吉三神に捧げるための神田を灌漑するべく造らせた用水路である。土木工事の時、工事の障害となった大岩を神功皇后が落雷によって破壊したという伝承が今日まで語り継がれているように、現人神社は先に取り上げた香椎宮や宇美八幡宮同様に、神功皇后の伝承が根付いている地域であると言えよう。

この現人神社に併設する社務所では、神功皇后関連商品を販売しており、それが今回取り上げる道中安全ステッカー符【図 12】と神社の由来を説いた絵本【図 13～図 15】である。ステッカーの神功皇后は凛々しい武将姿で描かれ、額に鉢巻を締め、右手には「道中安全 現人神社」と記された軍配を握っている。その背には箆と弓、二本の刀を差していることから、ややアレンジこそされているものの『八幡愚童訓』に代表される中近世の寺社縁起などの系譜に連なる作風であることは間違いない。現代のアニメやゲームのキャラクターを想起させるデザインは、サブカルに馴染んだ年代と親和性が高いことから、若年層を購買層とする商品だと考えられる。その点において、同じく社務所で販売されていた宮地嶽神社の掛軸とは用途のみならず、想定される購買層自体が異なっている。さらに、ステッカー符の裏面には次のような文言が確認できる。

愛する夫に代わり 身籠った状態であ

図 13 現人神社絵本『現人神社の神さま』①



りながら 力強く日本のために尽くした神功皇后。そんな神功皇后が これからの人生をより良いものへと 切り開いていこうとする あなたの道中の安全を お守りいたします

次に、社務所で発売されている『現人神社の神さま』<sup>(25)</sup>と題された絵本に描かれた神功皇后について取り上げてみよう。水彩画を連想させる柔らかなタッチと色彩で描かれた神功皇后は、貫頭衣を連想させるシンプルな白い衣装を赤い帯でしめ、緑の宝玉を連ねた首飾りを身につけている。一見すると、先に取り上げたステッカー符に登場する、漫画やアニメのキャラクターのような造形で描写された女武者姿の神功皇后とは全く逆のように見受けられる。

しかし、挿絵とセットで掲載されている絵本内の文章に着目すると、その共通点が浮かび上がってくる。現人神社の成り立ちを紹介する絵本は冒頭で神功皇后について紹介した後、次のように続けている【図13】。

しかし 困ったこともありました 神功皇后や仲良く暮らす人たちを苦しめている海の向こうの国々があったのです 神功皇后は 神様のお告げを聴きました (中略) 神功皇后は 夫の仲哀天皇と村の人々に 神さまのお告げを伝えました その直後のことです 仲哀天皇は病に倒れて亡くなってしまいました

そして、仲哀天皇の死を嘆く姿が描かれた次のページに、悲しみを克服した神功皇后は武装した姿で描かれる【図14】。この神功皇后は、額に鉢巻を締め、袴を連想させる下衣を着用し、弓矢を装備している。防具は古墳時代の短甲に見えなくもないが、簡略化された中世の鎧にも見えるため、断言はできない。ただし、文中の「男の衣装を身に付け」という文言から、神功皇后の服装が男装であること、絵本の内容が多少の脚色を加えつつも記紀神話の記述に準じたものであると推測することは容易である。なお、同じページ内で出兵前の神功皇后の妊娠が示唆されているが、絵本のラストページに至るまで、息子・応神天皇を出産した旨の記述は確認できなかった。

海の向こうの国々は 船に乗って来る 神功皇后を見てびっくりしました 今

図 14 現人神社絵本『現人神社の神さま』②



まさに 日本の国を攻め落とそうとしていた時だったのです（中略）「これではとても勝てそうにない いさぎよく負けを認めよう」 海の向こうの王たちは 金銀螺鈿 玉細工 世界のありとあらゆる不思議で綺麗なものを 神功皇后と日本の国の人々に贈りました

この時に獲得した異国の宝は大嵐によって失ったと次のページには記されているが、ここで語られているのは紛れもなく「三韓征伐」伝説である。ただし、『日本書紀』『古事記』とは異なり、仲哀天皇の死が天罰ではなく原因不明の病死に変化しており、侵略を先に企んでいたのが「海の向こうの国々」になっている。これらの要素からは、記紀神話を踏襲しつつも、元寇（蒙古襲来）

後に、石清水八幡宮の僧侶によって制作された『八幡愚童訓』<sup>(26)</sup> や近代以降の教科書の記述との共通点を見出すことができる<sup>(27)</sup>。しかしながら、改変によって神功皇后が獲得した宝を失っていること、征韓論の論拠となった神託の内容と「三韓征伐」後の服属のエピソードが省かれていること、三韓ではなく「海の向こうの国々」とぼやかされている点に、神社の由来を説きつつも、「三韓征伐」イデオロギーを排除して神功皇后伝承を取り上げようと苦心した痕跡を読み取ることができる。実際、絵本の中に記された神託の内容が記紀神話とは異なっているほか、仲哀天皇の死没の理由に敵国が関与しておらず、獲得した財宝を失ったといった要素から、従来の征服譚と同等のものとして位置付けるには差異がある。

絵本のラストページには、現代人を見守る神功皇后と筒男三神（住吉三神）の姿が描かれてはいるものの、先述の通り、出産の場面は描かれていない。したがって、ステッカー符の裏面に記された「愛する夫」という文言からも読み取れるように現人神社では、神功皇后のペアとして、息子の応神天皇や老臣・武内宿禰でもなく、夫である仲哀天皇を取り上げている。絵本内の「夫の代わりに私が海の向こうの国に行きましょう」という台詞から読み取れるように、神功皇后の「三韓征伐」を夫への献身の範疇に回収しているが、そのように「三韓征伐」を定義付けること自体は古くからあったことであった<sup>(28)</sup>。夫婦神として仲哀・神功のペアを打ち出している点では香椎宮

と同じだが、現人神社は香椎宮とは異なり、神功皇后帰国後に創建された伝承に基づいて建立された神社である。にもかかわらず、現人神社が母子ではなく、夫婦のペアで神功皇后を打ち出した理由として、2年前からはじまった現人神社の恋ぼんぼりとの関係性が考えられる<sup>(29)</sup>。2021年現在、現人神社は縁結び・恋愛成就の神社として人気を集め、10月末～11月にかけてピンク・ラベンダー・赤色のぼんぼりが境内の木杵を彩る写真がInstagramなどにUPされ、フォトジェニックなスポットとして人気を集めている<sup>(30)</sup>。こうした背景から、現人神社は母と息子の関係性ではなく、夫婦という関係性に基づき、仲哀・神功の夫婦神をペアとして打ち出すに至ったのであろう。ただし、そこには、先に取り上げた香椎宮同様に、少子化・晩婚化の状況の中で、異性愛、一夫一妻制を強固に唱え、家父長制を維持しようとする神社界イデオロギー、ひいては日本主義的イデオロギーが内在化しているとも言えるのである。

## おわりに

2009年以降、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」を世界遺産として登録させたい推進委員会の取り組みに関係する形で「古代の旅」のブランド化に行なわれ、「古代」というキーワードのもと神功皇后伝承が浮上するに至ったことが分かる。しかしながら、2016年に刊行された「福岡古代ロマンの旅」に基づき、2020年の年末から2021年にかけて、福岡県内にある「『神功皇后』ゆかりの神社」を探索した結果、ピックアップされた側で

ある神社と観光事業を促進しようとした公共団体との神功皇后に対する認識にはズレがあったと判明した。

そのズレの一部が、由緒書における神功皇后伝承の抹消であり、「古代」の、より具体的に言えば「三韓征伐」イデオロギーの排除を目的とするものであったことは容易に想像がつく。今回の探索を通して、21の神社を巡った訳だが、積極的に表象を通して、神功皇后を巷間に喧伝していると断定できる神社は4社しか確認できなかったことも上述のこうしたズレの一部として解釈できるだろう。そのうち、宮地嶽神社の掛軸からは、古墳時代の風俗を服飾に反映させつつも、中性的な風貌で神功皇后を描かれており、櫛や頭椎太刀から祭祀者であると同時に戦闘者としての、ある意味では普遍的な、記紀神話に基づいた伝統的な神功皇后イメージが汲み取れる。その反面、神功皇后の母性的側面が最も顕著である宇美八幡宮において、「三韓征伐」イデオロギーから乖離した新たな神功皇后イメージともいえる《子安乃像》が新しく生み出されている。さらに、神功皇后の海外出兵を、国際交流の一環、夫婦の愛に基づいた平和的事業として読み替えることによって、香椎宮・現人神社においては、仲哀・神功のペアが夫婦神として一定の地位を築きつつある。このように神功皇后を表現すること自体は、決して最新のものではないことは、先行研究においても指摘されてきたことである<sup>(31)</sup>。しかし、既存の神功皇后表象や言説との相違点を、それらが確かに内包していることに着目したい。

今回、福岡県における神功皇后の取り上げられ方が妥当かどうかの検討はしなかったが、敗戦より70年以上が経過した現代において、一度は忘却された神功皇后が、再び公の場において取り上げられるようになってきたことは事実である<sup>(32)</sup>。2021年の探索の結果、戦前の言説とは意識的に距離を置いた神功皇后表象が登場しつつあることを踏まえ、今後、現代における神功皇后はどのような言説とイメージを伴いながら浮上するのか、さらには、将来的にどのような存在へと変貌していくことになるのか、引き続き関心の対象として注目していきたい。

参考文献・HP ※注で引用したものは参考文献より省略

- ・香椎宮 <https://kashiigu.com> (2021/12/20 閲覧)
- ・住吉神社 <https://www.nihondaiichisumiyoshigu.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・宮地嶽神社 <https://www.miyajidake.or.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・箱崎宮 <https://www.hakozakigu.or.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・宇美八幡宮 <http://www.umi-hachimangu.or.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・現人神社 <https://arahito.com> (2021/12/20 閲覧)
- ・鎮懐石神社 <https://www.chinkaiseki.com> (2021/12/20 閲覧)
- ・志賀海神社 <http://www.shikaumi-jinja.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・竈門神社 <https://kamadojinja.or.jp/history/> (2021/12/20 閲覧)
- ・大己貴神社 <https://www.oonamuchi-jinja.or.jp/index.html> (2021/12/20 閲覧)
- ・風浪宮 <https://www.ofurousan.or.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・高良大社 <http://www.kourataisya.or.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・大善寺玉垂宮 <https://tamataregu.or.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・大分神社 <http://www.daibu-hachiman.com/index.html> (2021/12/20 閲覧)
- ・風治神社 <https://fuuji.net> (2021/12/20 閲覧)
- ・八幡古表神社 <https://kohyoujinjya.jimdofree.com> (2021/12/20 閲覧)
- ・若松恵比寿神社 <https://wakamatsu-ebisu.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・篠崎八幡宮 <https://www.shinozakahachimanjinja.or.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・和布刈神社 <https://www.mekarijinja.com> (2021/12/20 閲覧)
- ・宗像大社 <https://munakata-taisha.or.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 <https://www.okinoshima-heritage.jp> (2021/12/21 閲覧)
- ・裂田溝(裂田神社) <https://jinja-sanpaicho.com/jinja/jinja.php?id=0549> (2021/12/20 閲覧)
- ・日本服飾史 <https://costume.iz2.or.jp> (2021/12/20 閲覧)
- ・風俗博物館 <https://www.iz2.or.jp/top.html> (2021/12/20 閲覧)
- ・アンダーソン、リチャード、亀井良恵訳「征韓論と神功皇后絵馬——幕末から明治初期の西南日本」『列島の文化史 10』日本エディタースクール出版部、1996年。
- ・笹間良彦『時代考証 日本合戦図典』雄山閣出版社、1997年。
- ・トレーデ、メラニー「近代国家の象徴としての古代女神——紙幣における『神功皇后』の表象」『鹿島美術財団年報』第23号、327-338頁、2005年。
- ・吉田修作「異国へ巡行した〈みこともち〉神功皇后——新羅出兵・蒙古襲来・朝鮮侵略」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第17号、21-40頁、2007年。
- ・若桑みどり『聖母像の到来』青土社、2008年。
- ・綾杉るな『神功皇后伝承を歩く〈上〉福岡県の神社ガイドブック』不知火書房、2014年。
- ・綾杉るな『神功皇后伝承を歩く〈下〉福岡県の神社ガイドブック』不知火書房、2014年。
- ・上寫真弓『中世神功皇后言説』溪水社、2017年。
- ・原武史『皇后考』講談社学術文庫、2017年。

・宮下規久朗『聖母の美術全史』ちくま書房、2021年。

## 注

- (1) 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会による公式HP「世界遺産『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺跡群」における「登録までの取組」参照 <https://www.okinoshima-heritage.jp/know/registration.html> (2021/12/17 閲覧)
  - (2) 2021年9月10日～13日における福岡県観光振興課職員に対するインタビューを参照。なお、当時の資料が残っておらず、詳細について確かめようがないという前置きがされた上での回答になる。
  - (3) 福岡県観光振興課と共同プロジェクトに携わっている公益社団法人・福岡県観光情報公式サイト クロスロードふくおかHP内における観光パンフレット「福岡古代ロマンの旅 vol.3『福岡県の神社と神功皇后』」参照。 <https://www.crossroadfukuoka.jp/book/?ctgry=20> (2021/12/17 閲覧)
  - (4) 上記の公益社団法人と協力関係にある福岡県商工部福岡県観光振興課が管轄するHP「ご来福しよう 第二章 神功皇后とは？」参照。 <https://goraifuku.jp/beginner/index2> (2021/12/17 閲覧)
  - (5) 塚本明「神功皇后伝説と近世日本の朝鮮観」『史林』79巻6号、1996年、819-851頁。
  - (6) 磯田一雄『「皇国の姿」を追って』1999年、皓星社。
  - (7) 実際、福岡県は香椎宮や箱崎宮をはじめに、神功皇后伝承における重要なスポットが多いのが特色だが、その福岡県内においてさえ、1945年以降の教育を受けた者のうち、神功皇后について詳しく知る者はいなかったことが、これまでに筆者が行ってきた聞き取り調査によって判明している。
  - (8) 伝承によれば、夫である仲哀天皇亡き後、神功皇后は神託に従い、軍勢を率いて、渡海することを決意したものの、神功皇后のお腹には応神天皇が既に宿っていたため、神功皇后は戦いが終わってきから生まれてきてほしいと願い、腹の上に石を乗せ、その上から帯を締めた。この時の石が後に「鎮懐石」と呼ばれ、腹帯（岩田帯）同様、神功皇后の安産祈願の御利益を示すものとして扱われている。
  - (9) 神功皇后表象の通史的 analysis に伴うイメージの変遷については拙稿「神功皇后図像の再検証 —— ジェンダーの視点から見た、韓国併合後／戦後に
- おける図像の変容——」ジェンダー史学会『ジェンダー史学会第17号』2021年の記述を参照。
  - (10) 永井路子『歴史をさわがせた女たち 日本篇』（新装版）、文藝春秋、2003年。
  - (11) 今回の調査の際に、一部の神社の宮司さんに、持参した観光パンフレット「福岡古代ロマンの旅 vol.3『福岡県の神社と神功皇后』」を提示し、「こうした観光案内が過去にあったことを知っていたか？」といった旨の質問を行ったところ「(地元の)行政の方では色々あったらしいが、神社としては深く関わっていない」という返答をいただいている。
  - (12) 国指定重要文化財として1950年に登録。鎌倉時代末期の作として伝えられている。
  - (13) 1960年に福岡県指定民俗資料として文化財指定。室町末期の作とされ、国内唯一の脱活乾漆造の御神体として、境内に建立されている聖母宮に祀られている。
  - (14) 軍配が戦場において軍勢を指揮する際に使用されるようになったのが室町時代であることを考慮するに、神功皇后を「実在」の人物として考古学・歴史学的に正しい姿で描こうとする試みは失敗しているとも読み取れる。そのため、ここでの軍配は神功皇后を軍勢の指揮者としての地位を誇示（あるいは強調）する目的で書き込まれたものとして読み解くのが妥当であろう。
  - (15) 前掲の拙稿「神功皇后図像の再検証 —— ジェンダーの視点から見た、韓国併合後／戦後における図像の変容——」に基づく通史的 analysis を参照。
  - (16) 香椎宮の公式HPによれば、「三韓征伐」伝説に登場し、神功皇后の補佐役として勤めた老臣・武内宿禰の長寿の理由は、不老水の泉を飲んだためだという伝説が残されており、今日においても長寿の泉として近隣住民に親しまれている。なお、香椎宮のパンフレットによれば、神泉・不老水より汲み上げられた水は毎年正月に綾杉の葉・椎茸と共に皇室に献上されている。
  - (17) 例として、全国氏子会編『神国日本の精華』全国氏子会、1934年。また、井乃香樹『神功皇后』建設社、1935年の挿絵が挙げられる。
  - (18) 長志珠絵「天子のジェンダー」西川祐子ほか編『共同研究 男性論』人文書院、1999年。
  - (19) 香椎宮が「三韓征伐」のきっかけとなる神託が授けられた地であり、国定教科書の挿絵をはじめと

- し、香椎の浜を背景に出陣しようとする神功皇后表象が数多く制作されたことは疑いようのない事実であるが、それ故に、2021年より本格化した香椎宮の新たな取り組みに関心を向けざるを得ない。
- (20) 宮地嶽神社の許可のもと、社務所で発売されている掛軸の写真を撮影した。
- (21) 綾杉るな『神功皇后伝承を歩く 下 福岡県の神社ガイドブック』によれば、この二柱は筑紫君・岩井の孫であり、古い祭神を上書きする形で祀られているのではないかと推測している。
- (22) 2021年に行った、『子安乃像』制作に携わった株式会社・エフキャスト、デザインを担当された土井氏からの聞き取りに基づく。
- (23) 応神天皇が画中に登場する場合、神功皇后と向かい合うような形で老臣・武内宿禰に抱かれた赤子姿の三位一体像として描くことが伝統的であったため。
- (24) ただし、アジア・太平洋戦争時代に製作された数多くの表象を分析した若桑みどりが「前線の兵士」の対存在として「銃後の母親」を位置付けることが可能であると指摘したように、“母と子”の組み合わせが「平和」を意味する組み合わせであると結論づけるのは危険である。宇美八幡宮の《子安乃像》は神功皇后表象としては新しい部類に含まれるが、これが正しく「三韓征伐」イデオロギーとは距離を置いた「平和の像」として機能するののかについてはさらに綿密な分析が必要であるため、今後の課題としている。
- (25) 佐伯季紀『現人神社の神さま』現人神社、2018年。
- (26) 石清水八幡宮の僧侶によって元寇（蒙古襲来）後に制作された『八幡愚童訓』では、筑紫に出征した仲哀天皇が塵輪と言う空を飛び回る怪物を射殺したものの、反撃にあって討死する。この時、仲哀天皇は同伴した神功皇后の腹に皇子が宿っていること、自らの敵討ちを頼んでから死亡する。そのため、同書においての「三韓征伐」は報復を兼ねた復讐譚としての要素を有していることが特徴である。
- (27) 記紀神話において仲哀天皇は神託を疑ったために神の怒りを買って、天罰によって死没したと記されているが、その場合、最も尊崇されるべき皇室の権威を損ねるためか、仲哀天皇の死因を敵襲による陣没や病死と読み替えられていたことが、同時代の教科書教授法を記した書籍から伺える。大久保馨『尋常小学新国史指導書 上巻』明治図書、1934年。三木英太郎『尋常小学新国史精鋭 尋5』明治図書、1934年、参照。
- (28) 関口すみ子『御一新とジェンダー 荻生徂徠から教育勅語まで』東京大学出版会、2005年。若桑みどり『皇后の肖像 ——昭憲皇太后の表象と女性の国民化——』筑摩書房、2001年。
- (29) 2021年12月における現人神社関係者からの聞き取りに基づく。
- (30) 株式会社福岡放送が運営する福岡県の情報サイト「もっと福岡を、好きになる ARNE」における関連の記事「クリスマス前に恋愛運をあげる♡那珂川の『現人神社』でキュートな縁結びイベント開催中（2020/11/08）」を参照 <https://arne.media/go-out/80507/>（2021/12/20 閲覧）
- (31) 村山隆拓「大日本帝國政府起業公債イメージ——公債に描かれた産業——」『武蔵文化論叢7』武蔵大学、2007年。
- (32) 今回取り上げた福岡県の観光事業以外にも、民間事業においても神功皇后が多く取り上げられた例として、福岡県のラジオ放送局であるRKBでは2020年10月から2021年の3月にかけて放映された「古代の福岡を歩く シーズン6」全26回のうち10回が神功皇后伝承をメインとする内容であったことが挙げられる。[https://rkb.jp/search/?s\\_pgid=12760](https://rkb.jp/search/?s_pgid=12760)（2021/12/20 閲覧）
- 付記：神社訪問に際して、話をうかがった神社関係者などに感謝したい。
- （じんない えり 大阪大学大学院）